

魚河岸

芥川龍之介

青空文庫

去年の春の夜、——と云つてもまだ風の寒い、月の冴えた夜の
 九時ごろ、保吉は三人の友だちと、魚河岸の往来を歩いていた。
 三人の友だちとは、俳人の露柴、洋画家の風中、蒔画師の如
 丹、——三人とも本名は明さないが、その道では知られた
 腕っ扱きである。殊に露柴は年かさでもあり、新傾向の俳人とし
 ては、夙に名を馳せた男だった。

我々は皆酔っていた。もつとも風中と保吉とは下戸、如丹は名
 代の酒豪だったから、三人はふだんと変らなかつた。ただ露柴
 はどうかすると、足もとも少々あぶなかつた。我々は露柴を中に
 しなから、腥い月明りの吹かれる通りを、日本橋の方へ歩いて

行つた。

露柴は生きつ粹すいの江戸えどつ兎こだつた。曾祖父そうそふは蜀しよく山さんや文ぶん晁ちよう

と交遊かうゆうの厚あつかつた人である。家かも河岸かの丸清まるせいと云えば、あの界か

隈いでは知らぬものはない。それを露柴ろしばはずつと前から、家業かごふは

ほとんど人任せにしたなり、自分おれは山谷さんやの露路ろじの奥おくに、句くと書かと

篆てんこく刻こくとを楽たのしんでいた。だから露柴ろしばには我々われわれにない、どこかい

なせな風格ふうりゆうがあつた。下町したまち氣質かたぎよりは伝でん法ぽうな、山やまの手てには勿な

論縁ろんえんの遠とほい、——云いわば河岸かの鮪まぐろの鮨すしと、一味いまい相通あひずる何物なにものかが

あつた。……

露柴ろしばはさも邪魔じゃまそうに、時々ときどき外套がいとうの袖そでをはねながら、快活かいかつに

我々われわれと話し続つづけた。如丹にょたんは静しずかに笑わらい笑わらい、話わの相槌あいづちを打うつて

いた。その内に我々はいつのまにか、河岸の取つきへ来てしまつた。このまま河岸を出抜けるのはみんな妙に物足りなかつた。するとそこに洋食屋が一軒、片側を照らした月明りに白い暖簾を垂らしていた。この店の噂は保吉さえも何度か聞かされた事があつた。「はいろいろか?」「はいつても好いな。——そんな事を云い合う内に、我々はもう風中を先に、狭い店の中へなだれこんでいた。

店の中には客が二人、細長い卓に向つていた。客の一人は河岸の若い衆、もう一人はどこかの職工らしかつた。我々は二人ずつ向い合ひに、同じ卓に割りこませて貰つた。それから平貝のフライを肴に、ちびちび正宗を嘗め始めた。勿論下戸の風中や

保吉は二つと猪口ちよくは重ねなかつた。その代り料理を平げさすと、二人とも中々なかなか健啖けんたんだつた。

この店は卓も腰掛けも、ニスを塗らない白木しらきだつた。おまけに店を囲う物は、江戸伝来の葎よしずだつた。だから洋食は食つていても、ほとんど洋食屋とは思われなかつた。風中は詭あつらえたビフテキが来ると、これは切り味みじやないかと云つたりした。如丹はナイフの切れるのに、大いに敬意を表していた。保吉はまた電燈の明るいのがこう云う場所だけに難有ありがたかつた。露柴も、——露柴は土地つ子だから、何も珍らしくはないらしかつた。が、鳥打帽とりうちぼうを阿弥陀あみだにしたまま、如丹と献酬けんしゅうを重ねては、不相変快活あいかわらずにしやべつていた。

するとその最さいちゆう中に、中折帽なかおればぼうをかぶった客が一人、ぬつと暖簾のれんをくぐつて来た。客は外套の毛皮の襟えりに肥ほった頬ほおを埋うずめながら、見ると云うよりは、睨にらむように、狭い店の中へ眼をやった。それから一言いちごんの挨拶あいさつもせず、如丹と若い衆との間の席へ、大きい体を割りこませた。保吉はライスカレエを掬すくいながら、嫌な奴だなど思っていた。これが泉鏡花いずみきよたかの小説だと、任侠にんきよまろこ欣こぶべき芸者か何かに、退治たいじられる奴だがと思っていた。しかしまた現代の日本橋は、とうてい鏡花の小説のように、動きつこはないとも思っていた。

客は註文を通した後のち、横柄おうへいに煙草をふかし始めた。その姿は見れば見るほど、敵役かたきやくの寸法すんぽうに嵌はまっていた。脂あぶらぎった赭あから

顔は勿論、大島のおおしまの羽織、認めになる指環、——ことごとく型を出でなかつた。保吉はいよいよ中であつたから、この客の存在を忘れたさに、隣にいる露柴へ話しかけた。が、露柴はうんとか、ええとか、好い加減な返事しかしてくれなかつた。のみならず彼も中であつたのか、電燈の光に背きながら、わざと烏打帽を目深まぶかにしていた。

保吉はやすきちやむを得ず風ふうちゆう中じよたんや如丹と、食物くいものの事などを話し合つた。しかし話はずまなかつた。この肥ふとつた客の出現以来、我々三人の心もちに、妙な狂いの出来た事は、どうにも仕方のない事実だつた。

客は註文のフライが来ると、正宗まさむねの鑿びんを取り上げた。そうし

て猪口へつごうとした。その時誰か横合いから、「幸さん」とはつきり呼んだものがあつた。客は明らかにびつくりした。しかもその驚いた顔は、声の主を見たと思うと、たちまち当惑の色にvari出した。「やあ、こりや檀那でしたか。」——客は中折帽を脱ぎながら、何度も声の主に御時儀をした。声の主は俳人の露柴、河岸の丸清の檀那だった。

「しばらくだね。」——露柴は涼しい顔をしながら、猪口を口へ持つて行つた。その猪口が空になると、客は隙かさず露柴の猪口へ客自身の罍の酒をついだ。それから側目には可笑しいほど、露柴の機嫌を窺い出した。……

鏡花の小説は死んではいない。少くとも東京の魚河岸には、

未^{いまだ}にあの通りの事件も起るのである。

しかし洋食屋の外^{そと}へ出た時、保吉の心は沈んでいた。保吉は勿論「幸さん」には、何の同情も持たなかった。その上露柴の話によると、客は人格も悪いらしかった。が、それにも関^{かかわ}らず妙に陽^よ気^{うき}にはなれなかった。保吉の書斎の机の上には、読みかけたロシユフウコオの語録がある。——保吉は月明りを履^ふみながら、いつかそんな事を考えていた。

(大正十一年七月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：earthian

1998年12月28日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魚河岸

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>